慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ラッセルの思想とウキリアム・ジェームス（一）
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.8 (1920. 8) ,p.1150(122)- 1161(133)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200801-0122

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ラッセルの思想とウヰリアム・ジェームス（一）

奥井復太郎

一七九三年 William Godwin の The Inquiry concerning Political Justice, and its Influence on General Virtue and Happiness の一書の公にせられし後約一世紀を經て一九一六年 Bertrand Russell が Principles of Social Reconstruction は等しく社會改造の旗幟の下に刊行せられたり。

十八世紀末英吉利に於ける Radicalism の理論的代表者たりしゴットウヰンは當時革命の先導者の理論的計畫に對しては全く贊成しつゝも其實行手段に關しては同時代の政治家並びに哲學的著述家として著名なりし Edmund Burke と共に之を否定し冷靜なる論議があらゆる改革を實行するに必要なる唯一の方法なりとし遂に暴力に訴へんとする手段は悉く是を拒否しつゝ人間に依て人間に加ふる支配は何れも堪ふ可からざるものにして各人が自己の眼に映じたる正を行ふによつて事實社會にとつても最善を行ひ得べきの日即ち各人が何れも純然たる理性の原則によつて導かれ得べき日の來らん事を望めり。

吾人はウヰリアム・ゴッドウヰンが人間の理知に多大なる價値を認め理性による社會改造の可能を信せしを知ると雖も更に今日吾人に與へられたる社會改造の原理は正に之と異りたる方向に見出さるるに至れり。ベルトランド・ラッセルの前掲の書は人間の行爲の發現する源を人類の衝動に求め社會の改造は理知の力に訴へずして衝動を自由に解放する事によつて實現せらる可きを主張するもの也。

理性と衝動の比較は暫く措くもたゞ長く人間の理性のみが尊重せられ動もすれば衝動が人類の幸福に對する障害として閉塞せられしに反してこゝに衝動の解放が唱へらるゝに至りたる近代的變遷は眞に甚深なる興味を吾人に與うるもの也。

一

Wells の云へるが如く動的世界觀は近代思想の一特質也。『近世の空想家の懷けるユートピアはかのダーウヰンが世界の觀念を明かにせしに先だつて試みられたる無何有鄕又はユートピアに比して根本的相違を有す。彼等は何れも無缺の靜止的國家即ち事物に具有の不休錯綜の勢力を永久に征服し得たる幸福の平調なりき。人は德性と幸福の雰圍氣の中に大地の收穫を享得し且つ遂には神々をして無聊に倦ましむるに至る迄常に等しく德福を備へ何等僅かの變異をすら有せざる次の時代の連續す可き、完全にして且つ簡素なる社會を想へり。かくては變化並びに進歩の流は永久に破る可からざる堰塞によつて拒否せらる可し。然るに近世のユートピアはかゝる靜止的固定的永遠の理想に背馳してこゝに動的にして且つ更に光明に充てる多くの時代の來る可きを控へたる一の期望深き時代を造るものならざる可からず。今や吾人は事物の大なる潮流に逆ひ是を壓倒せんとするに非ずして寧ろ其の上に漂はんとし、防塞を築くに代へて吾人は時代の船を建造せんとす。永く彼等と其子孫に安固に且つ保證せられたる幸福の平等に喜悅し得る人民に對する秩序ある組織として吾人は個性の不斷の新しき變化が大なる進歩的發展の上に最も巧みに合一し得可き共同の可撓的調和を計畫せざる可からず。こは近世の意想に基けるユートピアが過去に描かれし凡での此等より異りたる第一義的にして一般的なる差異な

り。』（H. G. Wells' "Modern Utopia.）

發育及び變化は生物界に共通の一現象なり。從て其の間に於ける諸般の制度組織は永久に不變なるものなく絶えず流動し改變せらる。こゝにラッセルは最も完全に發育するものにとつて缺く可からざる變化の意義を明かにし自由の尊重が社會にとつて最も健全なる發展を促す所以たるを示せり。

『樹木に於けると等しく人は彼等の生成にとつて適切なる土壤と壓迫より脱せる完全なる自由とを要求す。是等兩者は政治制度の如何によつて或は援護せられ或は阻奪せらる。たゞ人の成育に必要なる土壤及び自由を求めん事は樹木の成長に要する是等を求めんよりは遙に困難なり。從て望ましき完全なる個々の發育を限定し表示するは至難にしてそは微妙且つ複雜なるを以て靈妙なる直觀によつて感ぜられ想像と尊敬とによつて仄かに了知し得らるゝに過ぎず』（前書二五頁）『然も近世に於ける多數人類の發育の原則は未開の時代より繼承せる制度の阻礙する所となり思想及び知力の進歩により又物質界の勢力に對する支配の增加により既に發育の新しき可能性は現れ人をして自由に彼の新しき要求が滿されざる可からざるを主張せしむるに至れり。』（同二二八）

生成は一の變化なり制度組織は常にこの變化ある健全なる生成の方向に遵應せざる可からず。單に過去の傳統的制度が進歩の障碍たるのみならず不變不動の絶對的理想組織を想ひ之に向つて社會改造を行はんとするは實に進歩に背馳せんとする企畫に過ぎず。

『嘗て企てられたる凡てのユートピアは何れも倦怠に堪へざるもの也。何等かの力を自らに藏せるものは Plato の Republic. Swift の Houyhnhnms の中に生れんよりは寧ろ物凄き恐怖に充てる現世の生活を希ふ可し。ユートピアを考成する人々は理想的生活に關して根本的に誤れる假定より進む。彼等は一定の社會狀態を想像し一度理想として承認するやそは永劫に理想として繼續す可き生活方法也と考へ得るものと信ぜり。彼等は如何に人の幸福の大部がその活動の上に存したゞ僅少の一部のみ消極的享樂に存するやを知らず。然も此種の享樂を與ふる快樂も多くの人にとつてそが活動の閒暇に存在する事によつてのみ悅ばしきものとなるなり』（同九三―九四）

改造の目的は單に正義の原則を確立せんとするものに非ず。

『正義それのみにては法制と等しく靜的なるが故に之を以て最高の政治原則となすを得ず。正義はそが確立せられし曉に於ける新しき生命の種子或は發展に對する刺戟を殘さず。此理によつて吾人が不公正を矯正せんと欲するや其の矯正が全社會にとつて有用なる可き潑溂たる活動に對する誘因を破壞せざるや否やを考慮するは必要なる事なり。』（同七〇頁）

『最も盛に諸般の改革を高唱する社會主義は主として公正を期するを目的とするもの也。……然れ共吾人は正義のみを以て獨り經濟的改造の基礎とするに足る原理と思惟するを得ず。あらゆるものが等しく不幸なるか或は又等しく幸福なるかの何れに於ても正義は確保せらると云ふ可し。正義が一度實現せられし時に於ては正義自らは何等新しき生命の源泉を有せず。彼のマルクス派革命的社會主義の舊き一派は Millennium の實現後の社會生活に想ひ到らざりき。Fairy story 中の皇子皇女の如く彼等は以後長く幸福に生活し得可きを信ぜり。然れ共そは人間

の性質よりして可能なる狀態に非ず。希望活動及び目的は望ましき生命にとつて必須のものにして、ミレンニウムは實に渇仰せる一個の歡喜なりと雖も實現の曉に於ては忍び得ざるもの也。』（同二二九―二三〇頁）

ラッセルが斯くの如き動的觀念は彼の戰爭並びに平和に對する思想によつて更に明かにするを得可し。

二

ベルトランド・ラッセルが Principles of Social Reconstruction の公にせられし一九一六年十一月はかの歐洲大戰の開始後二年餘佛蘭西方面に於ける獨逸の攻擊は一九一四年の夏に於けるが如く優勢ならずと雖も東部バルカン及び露西亞の方面に於けるその勢力は著しく發展し戰局の前途なほ暗憺たりしのみならず其の規模並びに慘害に於て未曾有の大戰亂は一面國家的軍國的精神を強固ならしむると共に他の一面に於ては痛く人心を動搖しこゝに戰爭を呪詛し平和を翹望するの念を熾ならしめたり。

ラッセルは等しく戰爭を非難し平和を尊重すと雖も自ら他の平和論者と異りたる根據より發せるが如し。即ち彼は國際勢力の固定的平和は決して望む可きものに非ずして勢力の流動的平衡こそ眞の平和として願ふ可きものなりと主張せり

『國家は全體にとつて一個の善良なる目的を有せり。人々の關係に於ては其の決定を彼等各自の力によらずして前以て定められたる法律による事なり。然れ共此の目的もただ一個の世界的國家によつて完全に貫徹せられ得可くかかる國家なくしては國際的關係を法律に訴へん事不可能なり。然も法律は力量的解決に優るの點ありと雖もなほ爭議を解決す可き最善の方法に非ず。そはたゞ靜止せるもの衰退しつゝあるものの上にこそある可けれ決して成育しつゝあるものの上に適せるには非ず。法律が理論として最上のものたる間はそは時々內的革命外的戰爭によつて應變せらる可きなり。此の兩者は勢力の時々の均衡と一致して法律を絕えず容易に改變し得るの仕組によつてのみ防壓するを得可く然らざれば各個の實力に訴へんとする動機は結局抑止せられざるに至らん。世界的國家又は聯邦が成立するに至らばそはかの海牙裁判所の採るが如き適法的公理に依る事なく能ふ限り事實戰爭によつて決定せられ得可きと同一の趣旨に於て問題を解決せざる可からず。權威の職能は個々の力そのものに訴ふるを無用ならしむ可しと雖も決して實力によつて達し得可き決定に反する解決を爲す可きに非ず。』（六五―六六頁）

即ちラッセルの主張は各々大小强弱の異れる勢力を現在的に固定せんとするに非ずして勢力の消長に依る變異を認むる流動的均衡を平和的手段によつて求めんとするにあり。

『或は榮え或は衰へ勢力の變轉し人口の衰縮する國家よりなる世界に於て永遠に Status quo の狀態を維持せんとするは不可能にして望む可からざるもの也。若し强ひて平和を持續せんとせば國家は彼等が先づ戰爭に敗れたる事又は讓步して屈辱を受けたる事を感ぜずとも地圖の不快なる改變は之を承認するに至るを知るべし。』（同八六頁）平和に對する愛着は眞に彼の言の如く餘りに國際關係に對する靜的觀念と結合すること大なりと云ふ可し。

ラッセルの斯の如き平和論は戰爭の原因に就て抱懷する彼の思想と全く一致す。彼は即ち戰爭の政治的又は經濟的原因を措きて他に其の原

因を求めんとせり。

『政治學が干繋する唯一の必要は社會の經濟的必要也とは政治思想の一つの因襲也。然れ共此の種の見解は目下の戰爭の如き事件に對しては全く不充分なる説明にして此の戰爭の原因と考察せらる可き經濟的動機なるものは甚しく根據を失へるものにして其の眞因は經濟的關係の他に是を求めざる可からず。』（四二頁）

『戰爭を誘起する經濟的政治的勢力なるものは平和に對する强固なる意志が凡ての文明諸國に深く存在するに至らば容易に之を他の方向に轉ずるを得可し。然れ共國民が戰爭の狂熱に乘じ易すき間は平和に對するあらゆる企圖は何れも不確實なるを免れず。戰爭に向つて國民が熱狂せざる場合に於ては政治的經濟的勢力は非常に破壞的にして且つ長年月に亘る戰爭を生み出す力なきに至るべし。平和論者の根本的問題は時々全國民を把捉する戰爭の衝動を防ぐにあり。』（同九二一—九三頁）而して『戰爭の因つて生ずる根本的事實は經濟的又は政治的事實に非ず又國際爭議の平和的決定に對する方法を見出し得ざるの機械的困難に依るものにも非ず。其の根本的事實は人類の大部分が調和よりは寧ろ鬪爭的衝動を有したゞ共同の敵を防ぎ又は之を攻擊する場合にのみ他と共同動作に出づるを得るものなる事なり。』（同一〇七頁）

『勿論世界に潑溂たる生命の力なくば平和を齎さん事容易なる可し。羅馬帝國は平和にして而して不生産的なりき。ペリクレースのアゼンスは最も生産的にして而して常に歴史上周知の優れたる好戰的國家なりき。……明かに凡て最もよきものを生み出す所のものと全く同一の生命の力が戰爭及び好戰的氣分を生ず。……平和主義が勢力を得且つ益する所あるものたらんにはそは國家を戰鬪並びに破壞に導かんとする潑溂たる生氣にして仁慈なる感情と一致す可き方面を與へざる可からず。』（同九四—九五頁）最も活潑なる生命を有するものの間にありては爭鬪は畢竟免れ難き現象なり。

『今日多くの國家を戰爭に導きつゝある衝動の大部分は盛なる進歩的生命にとつては至要のもの也。危險を想像し又はそを好むの念無くしては社會は直に沈滯し衰滅に向ふるに至るべく破壞並びに慘虐に至らざる程度に於ては爭鬪は人類の活動を刺戟し且つ死滅せるもの又は單に傳統的形骸を有するに止まるものの上に生存せるものゝ勝利を確證するに必要なるもの也。』（同九三頁）

ラッセルは理性によつて戰爭を回避するを得可しとの觀念に對して『若しも衝動が充分に制律せられ思想が情熱によつて支配せらるゝこと少なきに至らば人類は主戰的衝動の接近より自己の心を保全し得可く爭議は平和的に解決せられ得可し。こは一面に於て眞理なりと雖も決して滿足す可き見解に非ず。眞正なる思考に對する願望をそれ自ら一個の情熱として抱懷し得る人に於てのみ此の願望が戰爭の情熱を制馭するに足るものと考ふるを得るなり。情熱のみが情熱を制したゞ反對の衝動又は願望のみが他の衝動を阻止するを得可し。傳統的道德論者によつて唱へらるゝが如き理性は良き生命を致し得ざる畢竟消極的にして微弱なる生に過ぎず。戰爭を除き得るはたゞ理性によるに非ずして戰に導かんとする衝動を背馳する他の衝動並びに情熱の積極的生命に因る。』（同一二頁）

三

かくてラッセルは理知並びに衝動と其の人間の行爲に對する關係を最も明確に指示せり。人

間の凡での行爲は衝動又は願望より發現し從來願望が人間の行爲を支配する勢力は廣く認められたりと雖もその支配は人間の行爲の一部分然も僅かにその意識し明知し且文化せる部分に止まりて決して至要の方面を司るものに非ず。人間の本能的性能に於ては多く人は一定の目的を有する願望によらざる單なる衝動によつて行爲に導かる。

『成人は屢ば自ら小兒又は犬よりも合理的なりと思惟す。然も彼等はかくて無意識に衝動が彼等の生活に干與せる眞に大なる職能を掩へるなり。』（同一四頁）

『吾人の行爲の基礎として衝動は遙に願望を凌駕するもの也。願望は自ら獨自の職分を有するもそは吾人の思考する程に大なる職分には非ず。蓋衝動は常に是に隨從する假想的願望の整調せる連鎖を伴ふ。衝動は人をして彼等が衝動の飽滿より生ず可き結果を期望し且つ事實彼等の行爲が其の行爲自體には何等他に動因を有せざる場合に於ても彼等はその結果の爲めに行爲するものの如く思はしむ。勿論齎らさる可き賞讃を希ふの信念の下に書を著し畫を描くものある可し。然れ共そが完成せらるゝや否や彼等の創造的衝動にして消滅せざれば彼等の完成せし所のものは彼等にとつて全く興味なく更に新たなる製作を始むるに至る。藝術的製作に就て考へらるゝ所のものは吾人の生活中最も生氣ある凡てに就きて等しく考へ得るなり、直接の衝動は吾人は吾人を動す所のものにして吾人が抱けりと思念する願望は畢竟衝動に對する外衣なるに過ぎず。

『衝動と相對して願望が人の生活の規律に干與するの大にして且つ漸次增加しつゝあるは眞なり。衝動は奔放且つ放肆よく律則せられたる組織に容易に適合し得可きものに非ず。そは小兒又は藝術家には許さる可きも眞摯を尙ふ人には正しきものと思惟せられず。殆ど凡ての報酬を受くる勞務は願望によりて行はれ衝動によるものに非ず。勞務そのものは多少好ましからざるも之に對して受くる報酬は願はしきものなり。個人が勞働の時間の大部分を占むる行動は幸福なる僅かの人々を除いては主として此の目的によつて支配せられ是等の行爲其のものに對する衝動による事なし。かゝる點に於て何人も殆ど其の害を認めざるが如くそは蓋滿足す可き生命の中に於ける衝動の意義が認められざりしに因るものなり。

『實際に衝動と何等交渉を有せず又はそを想像だにもせざる人にとつては衝動行爲は常に狂ひ迷へるが如き觀ある可し。あらゆる衝動はその結果を全然豫知せざるに發するの意味に於て全く盲目と云ふ可し。衝動に交渉せざる人は結果の如何及び結果す可き事の望ましきや否やに關して各々異りたる評價を試む。かゝる意見の相違は一見倫理的又は知識的差異の觀ありと雖も要するに其の眞の基礎は衝動の相違に外ならず。衝動の相違の存在する間はかゝる場合に於ける眞の決定は遂に得られざる可し（同書一五頁を參照す可し）。活潑なる生命を有する人々にありては外部よりは全く不合理と考へらるゝが如き强き衝動を存す。時として盲目なる衝動は破壞並びに死に導くと雖も然らざる時は彼等は世界の有する最も優れたるものに導く可し。そは戰爭の原因なりと雖も亦等しく科學藝術戀愛の源たり。望ましきは衝動の萎靡に非ずして死並びに衰耗に向はんとする衝動を生命及び生成に向はしむるにあり。

『道德論者の主張し又往々經濟的必須の强請

より衝動を意思力によつて全く制律せんとするは決して望ましきものに非ず。衝動を排して目的及び願望によつてのみ支配せらるゝ生命は倦厭のそれにじて生活力消耗し人をして遂に彼が成就に努め來りし其の目的にすら無關心たらしむ。全國民が斯の如き生活を營むに至らば彼等は願望に對する障害を認め是を壓倒するの力を失ひて遂に衰ふるを免れず。インダストリアリズム並びに組織は絶えず文明諸國をして益々衝動に代へて目的による生活を強ふるもの也。斯の如き生存の方法は終局に於てそが生命の源泉を涸渇するに非ざればこゝに意志が常に制律せんとし思考によつて認識し得しものと異る新たなる衝動を生ず。然もかくの如き新しき衝動は其の結果に於ては嘗て阻止せられしものよりも更に惡しきものたるを免れず。過度の訓練殊にそが外部より强請せられし場合には慶幾虐と破壞の衝動を生むに至る、こは軍國主義が國民性の上に及ぼす弊害を說明する一理由たるなり。

生活力の缺乏反抗的反生命的衝動は自發的衝動にして其の行路を見出す能はざれば常にその結果として現るる人の衝動は個人の生得の性質によつて當初より決定せるものに非ず。一定の制限ありと雖も衝動は其の周圍並びに生活方法によつて著しく改變せらる。此等の變化の性質を研究し其の結果は當に政治的社會的制度の及ぼす利害の判斷に際して考慮せらる可き也。（同一六—一九頁）

ラッセルの主張は明かに個性の解放衝動の承認にしてそは又發展的生命の尊重なり。彼が政治思想の根本的二原則として擧げたる所は個人並びに社會の成育及び潑溂たる生命の發展の承認及び自由の尊重の二點也（同書二二七頁を參照せよ）前者は積極的自由とも見る可く後者は消極的自由なり。一は進步的發展を促す要素にして他はその發展に伴ふ弊害を緩和するの條件なり。ラッセルは他の社會改良家と等しく人類の自由放任は決して必然的に他に害惡を加ふるを事とするものにあらずといふ樂觀的思想を抱けるものの如しと雖も（同書二四—二五頁參照）拘束なき生命の發展が動もすれば他に對して威壓的態度に出づるの傾向を認めざるに非ざる也。（同二二八頁參照）然も彼の言の如く社會の健全なる發達も個人の成育も個人間の密接なる結合に因り階級的個人的分離は社會及び個人にとりて決して幸福なる狀態に非ずとせば（同書三三—三四頁、一四一、二一二、二〇九頁及び Roads to Freedom. 一〇頁參照）我の自由と社會の自由との衝突は、理論的信念は暫く措くも實際上如何なる調和を見出し得るや。

獨斷的宗教の衰亡が近世の最も著しき特徵なりと云ふラッセルの言葉は現代文明の科學的基礎を承認するものと云ふ可く實に自由の尊重變化の承認がよし如何に麗しき改造の美果を結ぶともそが社會生活の原動力を誤解しクロポトキンの自ら問へるが如く人間性の徹底的理解に基かざる以上は一個のユートピアたるに止まらん。ラッセルの見解果して眞に人生の根本的理解より發するものなるや否やは問はずとするも彼が論ぜるが如く個人の位置をあらゆる社會制度の上位に置きたるは近世の個性運動の第一義なる可し。個性の研究はかくてあらゆる社會改造の基調なり。吾人はかゝる意味に於て所謂人間精神解放の哲學の稱あるPragmatismの建設者たりしかの William James によつてその心理學的考察を窺はんと欲す。（未完）